

ファシリテーターとして主体的に話し合いを展開する力の育成に関する研究 ー遠隔合同授業での話し合い活動を通してー

光市立塩田小学校 教諭 宮本 亜希子

1 研究の意図

(1) 研究の背景及び研究テーマ設定の理由

中央教育審議会答申では、遠隔授業の積極的な活用により、児童生徒の学習活動の質を高める必要があると示されている。原籍校は小規模校で、昨年度から同規模の光市立東荷小学校（以下「東荷小」という。）と遠隔合同授業を通して児童同士の交流を行ってきたが、主体的に話し合いを進めていく点において課題が残った。児童が校外の児童との関わりに委縮し、教師主導の話し合い活動になったことが要因の一つであると考え。そこで本研究では、遠隔合同授業において、児童がファシリテーターの役割を務める活動を行うことで、主体的に話し合いを展開する力を高めることができると考えた。

(2) 研究の仮説

様々な学校との遠隔合同授業における話し合い活動において、児童がファシリテーターの役割を理解した上で、一人ひとりがファシリテーターとなって話し合い活動を展開することで、児童にファシリテーターに必要な力を育むとともに、主体的に話し合いを展開しようとする意欲や態度を身に付けさせることができる。

2 研究の内容

(1) 本研究におけるファシリテーターに必要な力（以下「ファシリテーター力」という。）とは

本研究におけるファシリテーターとは、「問題解決に向け、フォロワー（参加者）の意見を引き出し、考えを整理してまとめる人」とし、「ファシリテーター力」を表1に示す四つに整理した。

表1 ファシリテーター力

- | |
|---|
| ①話し合いの進め方の見通しをもつ
②相手の意見を最後まで聞き、反応する
③相手の発言を引き出す
④相手への配慮や気配りをする |
|---|

(2) ファシリテーター力を育む手立て

児童にファシリテーター力を育むことができるよう、以下の三つの手立てを行った。

ア 見通しー実践ー振り返りのサイクル

話し合いの目的やゴール、流れを共有してから実践し、実践後の振り返りから次の話し合いに向けた課題の発見につながるようサイクルを意識した。

イ ルーブリックによる自己評価

ファシリテーター力①～④に対応する4項目について、各項目に4段階のレベル（師匠、達人、修行中、初心者）を設定し、活動後に児童による自己評価を行った。

ウ 児童にとって自分事となる議題設定

美祿市立秋吉小学校（以下「秋吉小」という。）との遠隔合同授業では、自分事として主体的に話し合えるよう、共に地域や学校で取り組んでいる太鼓に関する議題に設定した。

(3) 授業実践

原籍校5・6年生6人を対象に、第1回は東荷小5・6年生5人と学級活動、国語科及び道徳科の学習を、第2回は秋吉小5年生9人と国語科の学習を遠隔合同授業で行った（表2）。

表2 授業実践の概要

第1回（6・7月：東荷小）全6時間（遠隔3時間）		第2回（10・11月：秋吉小）全7時間（遠隔3時間）	
学級活動	「上手にコミュニケーションするために」	国語科	たがいの立場を明確にして、話し合おう 「よりよい学校生活のために」（5年）
国語科	対話の練習「いちばん大事なものは」（6年）		議題「草炎太鼓（秋吉小）・石城太鼓（塩田小）のよさを広めるために何ができるか」
道徳科	「これって不公平？」（5年）		

(4) 授業実践の結果と考察

第1回では、話し合いの停滞に不安を感じる児童の姿が見られた。授業後の児童の振り返りの記述やループリックによる自己評価から、ファシリテーター力①と④に課題があることが分かった。そこで第2回では、手立てアにおける見通しと振り返りの充実を図った（図1）。

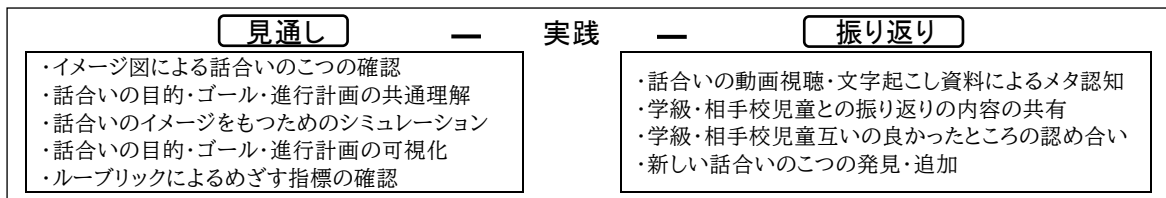


図1 見通しと振り返りの充実を図るための工夫

第2回後には、話し合いの停滞に特に不安を強く感じていた児童一人の意識の変化（図2）と振り返りの記述を基に、見通しと振り返りの充実を図るための工夫の有効性について検証した。見通しをもたせる工夫により、話し合いの目的やゴールを意識して進行しようとする意欲の向上が見られたことや、時間配分を考慮した進行の大切さに気付いた記述が見られたこと

		あてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
ファシリテーター力①に関する項目	話し合いの目的やゴールを確認してから話し合っている。	④	②	②	1
	話し合いの流れを確認し、どのように話し合いを進めたらよいか考えている。	④	②	②	1
ファシリテーター力④に関する項目	友達全員が公平に発言できるように声をかけている。	④	②	②	①
	なかなか発言できない友達を気づかい、優しく声をかけている。	④	③	2	1
話し合いの意欲態度に関する項目	オンラインで話し合うことは楽しい。	④	②	②	1
	いろいろな学校とオンラインで話し合いたい。	4	③	②	①

図2 児童の意識の変化 ※1回目△→2回目○

から、ファシリテーター力①が高まったと考える。また、振り返りを充実させる工夫により、気配りが自然とできるようになったことや、相手への配慮に関する記述が見られたことから、ファシリテーター力④が高まったと考える。さらに、ループリックの自己評価4段階を点数化（4点～1点）し、第1回と第2回の平均値を比較すると、全ての項目において上昇した（図3）。特にファシリテーター力①に関する項目①については、1.1点の上昇が見られた。

これらのことから、話し合いの議題を適切に設定し、手立てを工夫することは効果的であったと考える。

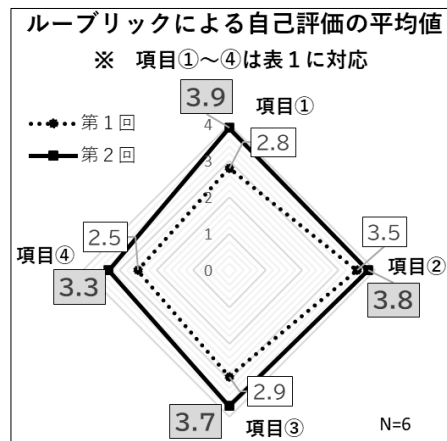


図3 自己評価の平均値の比較

3 研究のまとめと今後の課題

遠隔合同授業において、児童がファシリテーターを務める活動を取り入れることは、主体的に話し合いを展開する力の育成に有効であった。一方で、フォロワー同士の対話が停滞している場面が見られた。今後は、ファシリテーターがフォロワー同士の対話を促す働きかけを行えるよう、活動の工夫、改善を行い、主体的に話し合いを展開していく力の更なる向上につなげていきたい。

【参考文献】

- ・中央教育審議会、『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』, 2021, p. 84